【解説】　花鳥の間七宝額絵より

東京藝術大学教授　古田　亮

《黒鶫（くろつぐみ）に木瓜（ぼけ）・山桜（やまざくら）》

原画（東京国立博物館蔵）

七宝額（内閣府迎賓館蔵）

全長 20 センチほどの雄の黒鶫（くろつぐみ）。夏鳥とされていますが、ここでは春の花と組み合わされています。ポイントは画面の上の方からハラハラと舞い落ちる山桜の花びら 2 片。よく見ると下辺にも。省亭（せいてい）はしばしばこうした時間の流れのなかに花や鳥を描きました。画面の中心には艶のある黒々とした羽の黒鶫（くろつぐみ）、V 字に伸びた二つの枝は白い花を咲かす山桜と赤い花を咲かしている木瓜（ぼけ）です。こうした構図や配色は考え抜かれたもので、楕円の画面形式を見事に活かしているといえるでしょう。

《山翡翠（やませみ）・翡翠（かわせみ）に柳（やなぎ）》

原画（東京国立博物館蔵）

七宝額（内閣府迎賓館蔵）

柳の枝にとまる手前の鳥がヤマセミ、後方で細い枝につかまっているのがカワセミです。どちらも羽の色が鮮やかなことから〈翡翠〉の字が当てられて、飛ぶ宝石とも称せられてきました。躍動感のある２羽の鳥と枝垂れた柳の枝が織りなす複雑な構図は、省亭にしか創り出せない高度なものです。それにもまして、微妙に輝く羽の光沢や質感を描く技は、原画においては神業という域まで達していますが、七宝でもそのガラス質の特性を活かした再現が試みられています。

《鷭に花菖蒲》

原画（東京国立博物館蔵）

七宝額（内閣府迎賓館蔵）

額に目立つ鮮やかな紅色があり大きな声で鳴く鷭は、水田で外敵を威嚇する番をしてくれる鳥、ということでその名の由来があるといいます。花菖蒲と鷭という花鳥の取り合わせは江戸時代から円山派にも見られました。省亭の場合、花菖蒲は鯉と組み合わせて描くことが多かったとはいえ、お気に入りのモチーフでした。徹底した写生によって、その形状はもちろん、微細な色調の変化までも捉えようとしており、花菖蒲の青紫のグラデーションがこの作品の見所になっています。無線七宝の腕の見せどころでもあるでしょう。

《矮鶏（ちゃぼ）》

原画（東京国立博物館蔵）

七宝額（内閣府迎賓館蔵）

明治 26 年（1893）のシカゴ世界博覧会に出品されて高く評価された作品《雪中群鶏図（せっちゅうぐんけいず）》（東京国立博物館所蔵）が知られている省亭（せいてい）ですが、生涯にわたって鶏（この作品ではチャボ）を好んで描きました。鶏を数多く描いた伊藤若冲（いとうじゃくちゅう）に対するライバル心もあったかもしれません。他の作品とは違い雌雄のチャボを無背景の画面いっぱいに納めており、その描写力の確かさが際立って見えます。省亭（せいてい）の原画では、鶏冠の赤色に工夫があり、深みや濃淡を出すために微妙に墨を混ぜていたと言います。